
ラグナロクカオス

刻魔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラグナロクカオス

【Nコード】

N6352C

【作者名】

刻魔

【あらすじ】

ここではない世界の話。だけどどこにでもあるありふれた悲惨な光景……。オーデインという名の少年を中心に起こる物語は進んでいく。

硝煙と 血煙漂う プロローグ（前書き）

えーっと駄文第一作目ですハイ。更新はびっくりするくらい遅いですがよろしくお願いします。

硝煙と 血煙漂う プロローグ

引き金を引くとハンマーが火薬を刺激し着火させ金属の塊が吐き出される。

ただそれだけ…。

ただそれだけなのに…。

命は絶たれる…。

人も獣も…。

そして…神も…。

「…。」

軽い乾いた音と共に重苦しい湿った音が短く響く。死を産む音と産まれた死の音だ。

カチン

どうやら撃ちつくしたらしい。そんなことを考えながら次の弾倉をおもむろに取り出す。

殺気を殺した気配を近づけながら…。

気配は一気に近づいてくる。

「死ねえ!!」

そして一気に剣を振り下ろした。

「…遅い…。」

振り向きざまに放たれた一言とカトラスの一閃は背後から迫った気配を闇へと葬った。

「が…子…供？」

「…。」

朱に染まった少年は何事もなかったかのように弾倉が取り付けられたのを確認すると次の戦いへと歩を進めた。

パチパチパチ。

突然響いた拍手の音に動き始めた足を止め振り返った。

「いやあすごいすごい。さっすが英雄オーディン。」

どこか飄々とした風の青年にオーディンと呼ばれた少年は何を言うでもなく銃を向けた。

「あなたの噂は聞いている…ロキ。」

「へえ…どんな噂？」

ロキと呼ばれた青年は眼鏡を外し、レンズを磨きながら聞き返す。

どこか飄々としていても隙がない。オーデインはそんなことを思いながらそれでも照準を逸らすことはなかった。

「その手には」

「乗ってるよお。」

オーデインが引き金を引こうとしたそのとき、放り投げた眼鏡から閃光と爆音が放たれた。

「チツ…!!」

「ふふ…まだまだだねえ。」

素早く間合いをつめるとロキはオーデインの腕を蹴り上げる。

一瞬とはいえ握力を失った手から銃が離れ地面を転がった。

「調子に」

「乗ってないよお。」

即座に抜かれたカトラスを同じくカトラスで受け止めると返す刃で切り返す。

「いちいち人の台詞に」

「かぶせた方が手間が省けるでしょお？」

間の抜けた会話とは裏腹に一進一退の攻防が繰り広げられていた。時に死角から、時に真正面から切り合う。

「どこまでも」

「ふざけた奴ってのが性分なんだよお。」

幾度と切り結ぶたびにお互いに切り傷が増えていく。

これが永遠に続くかと思ったその時、巨大な何かが近づいてきた。

「来たみたいだねえ。」

「スレイプニル…。」

呻くように呟いたオーデインの目の前には白銀の6本足の馬が悠然と佇んでいた。

「すごいでしょう。オリハルコンとか色々ふんだんに盛り込んでるよお。」

「金と時間の無駄遣いだね…。」

呆れたように呟くが、自分の危機的状況を冷静に分析すると即座に次の算段をたてることにした。

「無駄だよお…オーデイン。」

「チツ…ん？」

何かがおかしい。違和感…どうやらロキもそれに気づいたらしくスレイプニルを訝しげに見つめた。

「う…ん…。」

「何？」

剣をしまい、あごに手を当てて考え出すロキ。いつそ切り捨てようかなどと考え始めたその時、ポンと手を叩いてこう言った。

「ああ…暴走してるみたいだねえ。」

「ふつう冷静に言う？」

「君だって冷静じゃないかあ…来るよ!!」

その言葉が合図であったかのようにスレイプニルは1度鳴いた後、オーディン達目掛けて駆けた。

不本意なやる気のない共闘

スレイプニルは己を昂らせるかのように高く鳴いた。

「ねえ…。」

「ん？何だい？」

「兵器なのに何で鳴くの？しかも結構うるさいし…。」

「決まってるじゃないかあ。」

さも当然といった感じで大袈裟に両手を広げるとロキはこう言った。

「形式美だよお。」

「あっそ…。」

「淡泊だなあ…。」

もはや何も言うまい。そう心に誓うとオーデインはカトラスを構え目の前の暴走兵器を見据えた。

「ま、ここは共同戦線で。」

「はあ…。」

「えゝゝそこでため息い!？」

言葉とは裏腹にさして傷ついた様子もないロキもカトラスを構えた。

それが合図だったかのようにもう一度高く鳴くとスレイプニルは2人めがけて駆けだした。

「っ…速い!! ねえ!! そのカトラスって特別製?」

猛スピードで突進してくるスレイプニルを何とか回避するオーディン。そんな調子なので会話も叫びながらといった感じだった。

と言うかこの状態でまともに会話していること自体すごい事なのだが…。

「ん？量産品よりはマシくらい…かなあ！！」

いつの間に用意したのかは謎なマシンガンで牽制しながら質問に答える。こちらもいい根性だ。

（にしても通常弾とカトラスじゃあ勝ち目ないねえ…。さあて、どうしたもんか）

避けては距離を置きの繰り返しでは2人の結果は目に見えている。オーデインもそれは考えていたらしく回避行動を繰り返しながら策を練っているようだ。

（カトラスも限界だな…さてどうするか…。）

「何かなあ？ オーディーン！！」

「頼らないで！！」

「ひどいなあ……。たとえば2人で放てる合体攻撃とか」

「あるわけない！！ ふざけないで！！」

「手厳しい…。」

追い詰められられるほど軽口が多くなる。どうやらそういう性格らしい…。

「ちっ…あまり使いたくなかったけど…!!」

そう言ってスレイプニルの突進をかわしながら懷に手を入れる。

「こいつで…!!」

投げつけたそれはスレイプニルに当たった瞬間、激しく炎を上げながら周囲ごと焼き払った。

「げほっごほっ…小型焼夷弾…あるなら使ってよお。」

あらゆる物が焼け焦げた臭いに顔をしかめながらロキは口を尖らせた。

「貴重なんだよ。それに…。」

オーデインはそう言う足元に落ちてた銃を拾い構えた。どうやらここまで計算して移動していたらしい。ロキは心の中で素直に賞賛しながら炎を警戒した。

直後、炎から生まれたかのようにスレイプニルが飛び出した。

「あんなの効くわけがない…。」

「さっすがぁ♪ made in 僕”の中でも最高けっさグボア
アア!」

自慢げに言うロキに無言の回し蹴りを喰らわせると自分も反対側に
跳び、攻撃をかわす。

その間わずか0.1秒。あらゆる意味で神業ともいえるタイミング
で引き金を引いた。

「まずは右目だ…。」

放たれた銃弾は正確にスレイプニルの右目を貫いた。

「すごい精密射撃…ていうかその弾…うっわ勿体なあ…。」

「どこから突っ込めばいいの？」

ため息混じりにそう言うのと同時に、2個目の焼夷弾をスレイプニルに投げつけた。

「これで…!?!」

予想と期待を裏切るように炎の中から豪速の銀馬がオーデインをばね飛ばした。

「オーデイン!!」

「がっ…!?!」

不意打ちを喰らい地面を転がるオーデイン。ダメージが大きいのか立ち上がる気配はなかった。

スレイプニルはもう一度高く鳴くと、止めを刺すべく動き出した。

「ぐっ…。」

起き上がろうにも体が言うことを利かない。もう最後だと目を瞑った。

その時…。

トスン…。

「詰めが甘〜い。」

軽い音と共に破壊された右目にナイフが刺さった。

「立てるか？ オーディン。」

「チャンスとか…狙いすぎだよ…。」

差し出された手を取りよろよろと立ち上がるオーディン。悪態をつくことも忘れなかった。

「止まったの？」

「特殊なナイフだからねえ。」

「全く動かないと思ったら…。」

小さくため息をつくと流れるような動作で引き金を引いた。

「詰めが甘いのはどっち？」

硝煙がたなびいた…。

リスキーな 狂乱じみた 舞闘会

銃声がこだました…。

「詰めが甘いつていうか…ここまで手の込んだお芝居しというて舞台準備がお粗末だよ。ロキ？」

「うわぁ…耳が痛いなぁ。」

頬をかいて苦笑するロキに対して肩をすくめると、ロキのはるか後方で倒れている兵士を一瞥し、銃を下ろした。

「その後ろにいるの…死んだか確認しといてよ…。」

「はいはい…仰せのままにと…。」

相変わらずの笑顔なのだが周囲を見回すその目はどこか鋭さを帯びていた。

瞬時に背中合わせに構える。

「うーん…囲まれてるねえ。」

「そのぶっ倒れてる馬…使えないの？」

「ちょっと無理させすぎたみたいだからねえ…。改良の余地があるねえ。」

「使えないな…。」

冷淡な口調で話すオーデインに抗議の声を上げるロキだが、全く取り合う様子はなかった。

「銃ないの？」

「うん…。」

短くため息をつくど2丁の銃とマガジンを黙って押し付けた。

「銃器に関してはどこかの猫型ロボットもびっくりだねえ…。」

「危ないネタよそうよ…。」

呆れながら2丁拳銃を構える。ロキも準備完了と言った感じだった。

「そんじゃま、よーい…スタートおー!!」

散開。遅れて銃弾の雨が彼らがいた場所に降り注ぐ。

「遅い…!!」

気配のした方向に何発か放つ。放たれた弾に近い数の気配が絶えた。

「ナイス精密射撃い。それじゃあ僕も!!」

銃弾の雨の中を危ういステップでかわしながら銃を構える。

「よく狙いなよお!!」

乱射。何人かの兵士が沈黙したがおっかなびっくりな戦い方である。

「さってとお…。」

撃ちつくした銃を捨て、殺意を織り交ぜた笑顔で敵に近づく。

「くっ…!!」

「おっそおい。」

敵がカトラスを抜こうとするが、懷にもぐりカトラスの一閃で片付けると、間髪いれずに敵の手を離れた銃を空中でキャッチし振り向きもせずに後ろの兵士を撃つ。

「僕すっごーい。」

「あいつ…。」

物陰に隠れ、撃っては撃ち返しの銃撃戦を繰り広げながらロキが銃を捨てた瞬間を目撃する。

「突撃馬鹿…。」

忌々しげに吐き捨てると絶命した兵士を持ち上げる。

物陰から現れた人影に銃弾が集中する。同時にこちらにも銃を乱射する。

「はあ…一発殴ろう…。」

かぶった血を拭いもせずにマガジンを交換する。

直後、ライトがオーデインを照らしエンジン音が響いた。

「バイクか…。」

いいオモチャを見つけたといった顔で銃を構えると、走り出す。

同時にバイクに乗った兵士達が散開する。2人がカトラスを、残りの3人が銃を構え走る。

一人が放った銃をかわし反撃に入ろうとする。

「っ…!!」

本能的に横に跳び転がる。次の瞬間、十字砲火が襲い掛かった。

ギリギリのところかわし再び銃を構えるが、間髪入れずに2つの閃きが襲い掛かる。

「ちい…!!」

片方の銃が真っ二つになり、頬に裂傷が走った。

「不利だね…。」

抑揚のない声でそう言い、対峙する。

「…少しだね。」

初めて見せる鋭い笑顔でそう呟くとカトラスを抜いた。

「さあて…さっさと合流しちゃうか…。」

血にまみれたカトラスを拭きながら軽い口調でそう言う。周りに大量の屍が転がってるだけにギャップがありすぎて狂気すらかもしれない。

「いやあ…彼射撃の腕すごいや…って危なっ!!」

横っ飛びに転がる。次の瞬間、かつてロキのいた場所に凶悪なまでにでかい剣が突き刺さっていた。

「ほお…わしの一撃をかわすとは。」

岩。一言で形容するならそんな感じの男だった。

立派な顎鬚を撫でながら屈強な体格の老人はニヤリと笑った。

「別格さんいらっしゃーい…。」

引きつった笑いで構えると老人も不適に笑い大剣を構えた。

「真っ向勝負…!!」

（できれば遠慮したいんだけどなあ…。）

心の中でそう呟くと逃げる算段込みで戦闘に入った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6352c/>

ラグナロクカオス

2010年11月14日09時37分発行